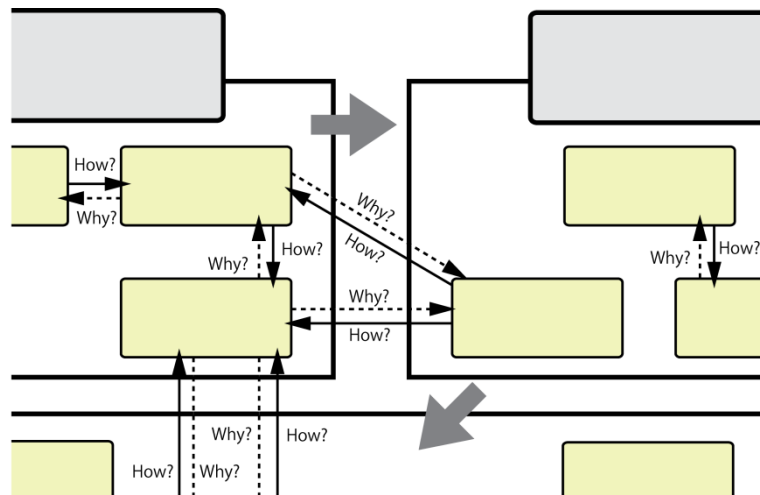


ティーチング・ポートフォリオ



平成 24 年 8 月 10 日作成

平成 26 年 12 月 17 日更新

平成 29 年 3 月 27 日更新

令和 2 年 9 月 8 日更新

大阪府立大学工業高等専門学校

総合工学システム学科 都市環境コース

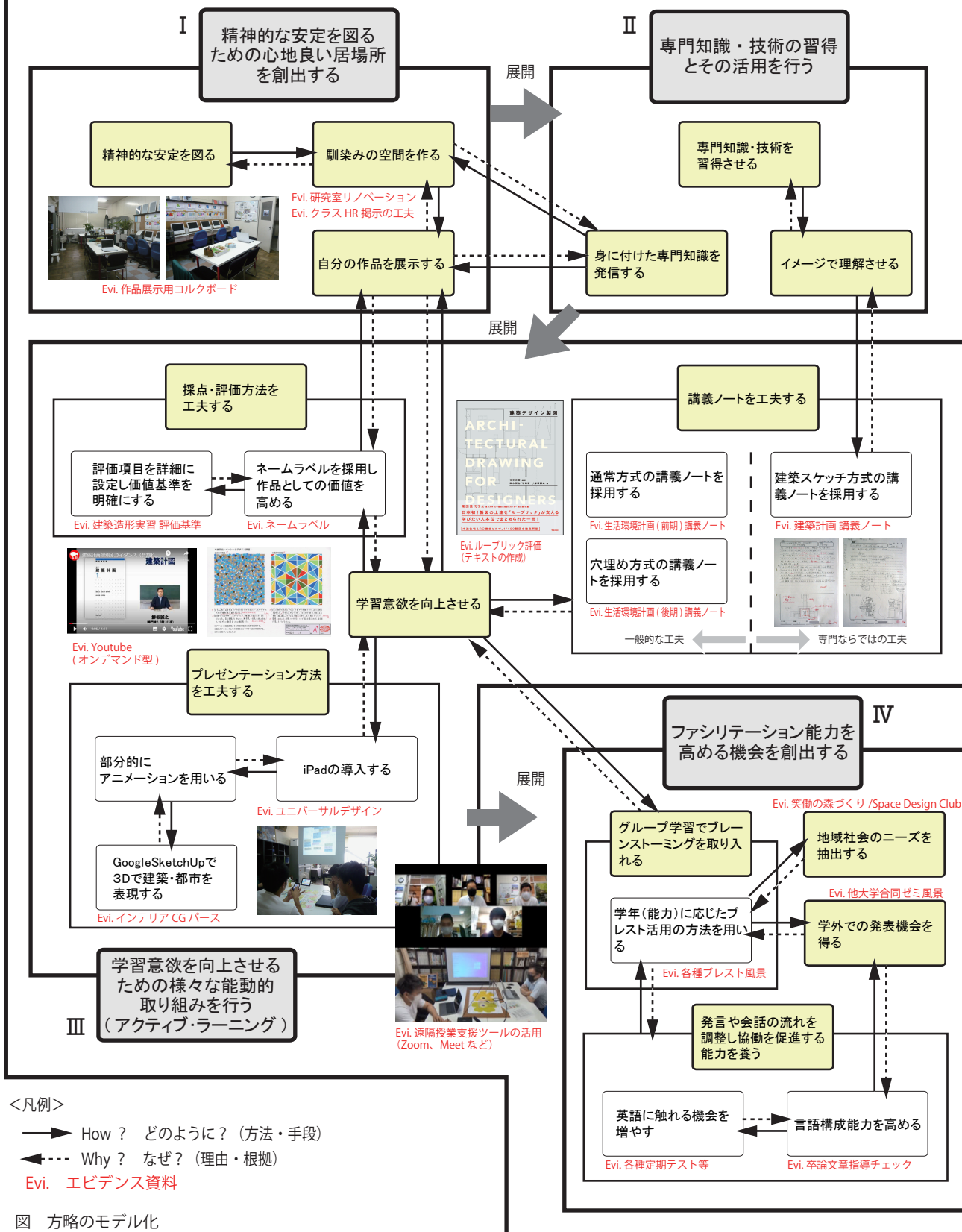
准教授 鯨坂誠之

教育活動の理念

実社会において多種多様な専門性を尊重しつつ公平な立場に立ち、
「状況に応じたリーダーシップを発揮」できる人を育てる

教育活動の理念を実現するための方略

学生にとって心地よい居場所の創出が、専門知識・技術の習得に伴う様々な課題に対し、教員や学生相互の関わりを通して克服していく際の心理的・物理的な拠り所の確保につながる。その上で学習意欲を向上させるための多角的な取り組み（建築スケッチ方式の講義ノート、ネームラベルによる採点・評価、タブレットを利用したプレゼン、討論スタイルのグループ学習、ZoomやMeetといった遠隔授業支援ツールなど）を通じて、「ファシリテーション能力を持った人」を育てる。



目次

1. はじめに	・・・1
2. 教育活動の理念と方略『状況に応じたリーダーシップを発揮できる人』	・・・1
2-1. 理念と責任の範囲	・・・1
2-2. 理念を実現するための方略	・・・2
(1) 現段階における教育方略のモデル化	・・・2
(2) 方略相互の関係性についての詳細	・・・2
① 精神的な安定を図るための心地よい居場所の創出（方略Ⅰ）	・・・2
② 専門知識・技術の習得とその活用（方略Ⅱ）	・・・3
③ 学習意欲を向上させるための様々な能動的取り組み（方略Ⅲ）	・・・3
④ ファシリテーション能力を高める機会の創出（方略Ⅳ）	・・・4
3. 責任の範囲（理念を実現するための方略Ⅰ～Ⅳとの対応）	・・・5
3-1. 科目との対応	・・・5
(1) 建築計画	・・・5
(2) 生活環境計画	・・・5
(3) ユニバーサルデザイン	・・・5
(4) 建築造形実習	・・・5
(5) 基礎研究	・・・5
(6) 卒業研究	・・・6
3-2. その他の取り組みとの対応	・・・6
(1) クラス担任（4 年次・5 年次 都市環境コース）	・・・6
(2) クラブ活動（Space Design Club）	・・・6
4. 評価と改善すべき点	・・・7
4-1. 公開授業シートに基づく自己評価・他己評価と改善点	・・・7
4-2. 自主的な教員の集まりに基づく授業改善点の検討	・・・7
4-3. ティーチングポートフォリオに関する取り組み	・・・7
5. 今後の目標	・・・7
5-1. 短期目標	・・・7
(1) クラブ活動における教育的視点からの学外表彰	・・・7
(2) 学友会活動の支援における BS&KJ の活用	・・・8
5-2. 長期目標	・・・8
(1) 『「相互の関係」を捉えられる人』	・・・8
(2) 『各々の専門性を「拡張」できる人』	・・・8
6.エビデンスリスト	・・・9

1.はじめに

本ティーチング・ポートフォリオ（以下、TP）の作成及び更新の目的は、私自身の教育活動の方向性を明確にするとともに、その質を向上させることである。

2.教育活動の理念と方略

2-1. 理念と責任の範囲

私は2012年4月に大阪府立大学工業高等専門学校（以下、府大高専）へ着任してから、現在8年が経過している。また、前歴では約10年間に及び建築設計・まちづくりに関連する実務を経験してきた。その実務経験で痛感したことは、実社会において「ものづくり」を行うためには、多種多様に存在する人々との関係性を捉える必要があり、専門的な知識や技術の習得だけでは不十分であるということであった。かつての建築家は、圧倒的な独創性により魅力的なデザインを提案することで建築や都市を創造してきた。しかしながら現在ではそれに加えて、人がつながる仕組みをデザインするプロセス（いわゆるコミュニティ・デザイン）も求められるようになってきている。モノづくりからコトづくりへ、さらにはヒトづくりへとパラダイムシフトが起きているのである。私はそうした状況を踏まえ、教育活動を展開することを意識し、**実社会において多種多様な専門性を尊重しつつ公平な立場に立ち、『状況に応じたリーダーシップを発揮できる人（ファシリテーション能力を有する人）を育てる』ことを教育理念**に掲げることにした。私は「ものづくり」を通じて人がつながる仕組みをデザインしていきたいと考えているが、そのためにはファシリテーション能力が欠かせない。

一方、私が所属する府大高専では「自律・実践・協調」¹⁾が教育理念に掲げられている。私自身が掲げた教育活動の理念と比較してみると、とくに「協調」の中で説明されている「社会や組織の中で、自らの役割や責任を自覚し、異なる考えや立場を持った他者とも対話をもって共通理解をつくり、協力して取り組むことのできる社会性と、リーダーシップをもった人材を養成すること」にある人材像と合致している。なおリーダーについては、通常、主導者や統率者といった意味で用いられることが多いが、私が専門とする建築や都市、さらにはまちづくりといった分野では、近年ファシリテーターやコーディネーターといった考え方も示されるなど、その捉え方は多様化してきている。

表1 担当科目一覧

[2020年度前期末現在]

授業科目名	担当時期	学年等	期間	内容
ユニバーサルデザイン	2012年度～2014年度	5年	半期	ユニバーサルデザイン
	2020年度～現在	専2年	半期	インクルーシブデザイン
建築計画	2013年度～現在	3C	通年	計画原論・建築史・施設計画
専門課題学習	2012年度	3C	通年	計画原論・設計製図
工学演習Ⅰ	2012年度・2013年度	3C	半期	建築史
工学演習Ⅱ	2012年度・2013年度	4C	半期	施設計画
工学演習Ⅲ	2012年度	5C	半期	建築法規
生活環境計画	2012年度～2015年度	4C	通年	環境工学・建築設備
環境エネルギー	2012年度・2013年度	4C	半期	環境工学
総合工学システム概論	2013年度 (2013年度～2016年度)	1年	半期	工学システムの概論 (ブレインストーミング・KJ法)
総合工学実験実習Ⅱ	2015年度～現在	2年	通年	設計製図（製図基礎）
総合工学実験実習Ⅲ	2012年度	3C	通年	設計製図（建築図法）
建築造形実習	2013年度～現在	3C	半期	設計製図（建築図法）
住環境設計演習	2012年度～2016年度	5C	半期	設計製図（住宅設計/木造・RC造）
	2020年度～現在			
総合課題学習	2012年度～2014年度	4C・5C	通年	設計製図
工学システム実験実習	2014年度・2015年度	専1年	半期	工学システムの融合
基礎研究	2014年度～現在	4C	通年	研究（前期:PBL、後期:ブレ卒研）
卒業研究	2012年度～現在	5C	通年	研究

注）Cは都市環境コースを、括弧はオムニバスでの担当を示す。

その中でもファシリテーターに求められる役割は、私が掲げる教育活動の理念に最も近いと言える。そのため私は、各々の専門性を尊重しつつ公平な立場に立ち、状況に応じたリーダーシップを発揮できる人のことを、ファシリテーション能力を有する人と位置付け、そうした人を育てることを重視したい。

この理念に基づき、私が現在までに経験した全科目を一覧で挙げるとともに[表1]、そのシラバスをエビデンス資料²⁾として添付する。

2-2. 理念を実現するための方略

(1) 現段階における教育方略のモデル化

本 TP では、理念を実現するための方略を一つずつ付箋ラベルに抽出し、KJ 法（以下、KJ）を用いてボトムアップ式に情報統合し、モデル化を図ることとした[表紙及びプレゼンシートの図を参照]。その際に、従来の KJ とは異なり、ある一つの教育方略を実現するための「方法や手段（How?）」を実線の矢印で示し、その「理由や根拠（Why?）」を点線の矢印で示す関係線を描く点を応用している。

その結果、教育方略は『学生にとって心地よい居場所の創出が、専門知識・技術の習得に伴う様々な課題に対し、教員や学生相互の関わりを通して克服していく際の心理的・物理的な拠り所の確保につながる。その上で学習意欲を向上させるための多角的な取り組み（建築スケッチ方式の講義ノート、ネームラベルによる採点・評価、タブレットを利用したプレゼン、討論スタイルのグループ学習など）を通じて、ファシリテーション能力を持った人を育てる』ことにまとめられた。

(2) 方略相互の関係性についての詳細

モデル化ではボトムアップ式に作業を進めているが、以下の詳細においては、説明の便宜上、見出しごとにトップダウン式で記述を行う。

① 精神的な安定を図るための心地よい居場所の創出（方略Ⅰ）

着任当初、私の研究室には何もなかった。そこで、まず学生とともに研究室の床を磨くことから始めた。次に、研究室のレイアウト³⁾を学生に呼びかけ、自由にデザインさせ、最終的な方針として 3 つのデザインアイデアを採用した。「作品掲示用コルクボード」「プレゼンテーション用スクリーン」「図書管理システム付き本棚」である。結果的に、学生が自らデザインした研究室は、彼らにとって最も心地よい居場所となったようである。

なかでも自分の作品を展示することで馴染みの空間を創出し、それによって精神的な安定を図るといったアイデアは、私の学術研究の成果にも通ずるところがある。私は認知症高齢者の施設環境整備に関する研究⁴⁾を行っているが、その知見の一つに、急激な環境の変化を軽減するためには馴染みの空間を創出することが有効であることが示されている。そして、精神的な安定が図られることによって、他者との交流やイベントへの参加が促される。こうした知見からも明らかなように、高専生活の中で学生にとって心地よい居場所を創出することは、心理的・物理的な拠り所につながると考える。なお、2020 年現在も、学生が使用する室を自由にデザインする伝統は引き継がれている。

さらに、この発想をもとに、クラス担任を受け持った際には、4 年次・5 年次の都市環境コースにおけるホームルームのしつらえ方にも応用した。学生たちに考えさせたクラスの学級目標やインターンシップ案内、就職案内などを掲示する壁面に、木製のラベルを効果的に取り付けることで、教室全体を木のぬくもりが感じられる暖かな雰囲気となるよう心掛けている。

これらにより教室や研究室を学生たちにとって心地よい居場所とすることが可能となった。

② 専門知識・技術の習得とその活用（方略Ⅱ）

私の専門は建築計画・デザインであることから、授業においては必然的に図面やパース、建築写真といった手段でイメージを伝える必要がある。そこで授業では講義ノートに工夫し、**「建築スケッチ方式の講義ノート」**⁵⁾を採用している。

これはおもに、「建築計画」（とくに建築史の範囲）において、毎回の講義ごとに回収・採点・返却（次回講義の開始時）をするための配布プリントのことである。とくに建築史の範囲では、文章的な意味のみならず、歴史的な建築物や都市計画を、ビジュアルなイメージとともに理解させなければならない。そのためには文字情報を「書く」だけでなく、スケッチを「描く」ことが重要である。そこでこの講義では、教科書主体の講義を展開しながらも重要なイメージを講義ノートにスケッチする方式を取っている。なお、これは私が師事していた工学院大学谷口宗彦教授が約30年間取り組んできた方法で、一定の効果があることが確認されている。その既往版では、罫線が引かれているだけであるが、私はこれに改良を加え、講義内容が記録できる罫線部分と、建築スケッチを描くための空欄部分を分割して1枚に収めるデザインとしている。私はさらに、この講義ノートにループリック評価の表を導入し、学生相互が講義ノートを使って教えあう『学び合い』を実施できるような工夫を追加している。

③ 学習意欲を向上させるための様々な能動的取り組み（方略Ⅲ）

専門知識・技術の習得には、学習意欲の向上をいかに行うかといった視点が重要である。そこで私は前述の講義ノートの工夫以外にもいくつかの能動的な取り組み（アクティブ・ラーニング）を行っているので以下に記述する。

- 1) まず建築スケッチ方式以外の講義ノートの工夫が挙げられる。一つは「生活環境計画」の授業で用いている**「通常方式の講義ノート」**⁶⁾である。これは、9mm間隔の罫線が引かれ、タイトルと日付・出席番号・氏名・評価欄が設けられたA4用紙で、毎回の講義ごとに回収・採点・返却（次回講義の開始時）をするための配布プリントのことである。もう一つは**「穴埋め方式の講義ノート」**⁷⁾であり、おもに「建築計画」や「生活環境計画」、「ユニバーサルデザイン」で配布しているプリントのことである。

また、私はパワーポイントを用いて、視覚的イメージをビジュアルな映像として表示する機会が多いため、学生に能動的にポイントを捉えさせるための工夫を行わなければならない（パワーポイントの表示だけでは学生が寝てしまう）。そこで重要な箇所を空欄にしておき、パワーポイントで表示された要点を記入させる方法をとっている。決して斬新な方法ではなく、多くの教員が行っている手法と考えられるため、前述②とは分けて記述している。

さらに、ループリック評価を設計製図にも取り入れるため、『建築デザイン製図』（学芸出版社）というテキストを作成した。これにより、講義科目だけでなく、「住環境設計演習」などの演習科目や、「総合工学実験実習Ⅱ」「建築造形実習」などの実習科目においてもアクティブ・ラーニングが可能となった。

- 2) 次に、**「ネームラベルによる採点・評価」**方法の工夫が挙げられる。前述①の「作品掲示用コルクボード」⁸⁾では、身につけた専門知識・技術を発信することと、学習意欲の向上を意図して学生自身の作品を展示することを試みている。その場合、具体的には評価項目を明確にし、価値基準を示した上で、評価を行うようにしている。そして、その価値基準に基づき評価された結果が記入されたネームラベル⁹⁾を作品に張り付けているため、作品としての価値を高める効果が得られている。

また、「生活環境計画」では、定期テストで出題した小論文課題と同様の質問を、実社会における諸問題を意識させる意図で実施した見学会のレポート課題においても再度出題し、体験前と体験後の意識の変化を比較する試み¹⁰⁾も行っている。その際にも、評価基準を事前に示し、その変化を読み取ることが可能な工夫を行っている。

- 3) さらに、タブレットを利用したプレゼンテーション方法の工夫が挙げられる。府大高専は工業系の学校のため、プレゼンテーションの際に目新しいOA機器・機材を用いると学生の興味を引きやすいことが分かった。そこで、私自身が所有しているタブレット(iPad等)を用いてプレゼンテーションを行う時間を意図的に捻出した。パワーポイントにおいても、必要に応じてアニメーションを用いて演習課題の解法手順を提示したり、コンピューターグラフィックスを用いて建築・都市空間を表現したりするなどの取り組みも併せて行っている。
- 4) 2020年度からは、世界的に流行したコロナウィルス感染症対策のため、インターネットを活用した授業が余儀なくされた。そこで私は積極的に取り組むこととし、とくに「オンデマンド型」の授業を採用した。学生がいつでもどこでも自由に学習できる点に魅力を感じており、そのスタイルは(私の専門でもある)ユニバーサルデザインに通じるところがある。既存のパワーポイントを活用して音声編集ソフト(Audacity)や動画編集ソフト(Filmora)でデータを作成し、Youtube(限定公開URL)にアップロードしたものをMoodleやGoogle Classroomで学生に提供する手法を採用している。小テストやレポート課題もこれらのツールを活用して回収し評価を行っている。

④ ファシリテーション能力を高める機会の創出(方略Ⅳ)

学習意欲を向上させる意図に加えて、学生のファシリテーション能力を高める機会を創り出す上で有効な手段の一つに、討論スタイルのグループ学習としてブレインストーミング(以下、BS)とKJを取り入れること¹¹⁾が挙げられる。ここでいうBSとは、集団でアイディアを出し合うことによって相互交錯の連鎖反応や発想の誘発を期待する手法である。これを行うためには、経験豊かな指導者(まさに、ファシリテーター)が必要となるが、私は実務経験におけるまちづくり活動を実践する中で、長年に渡って地域住民からの意見集約の手法として取り扱ってきた経緯がある。そこで、その手法を教育活動にも応用している。おもに「ユニバーサルデザイン」「基礎研究」「卒業研究」で取り扱っている。とくに、複数の教員で受け持つ科目で使用する場合には、他の教員とファシリテーション技術(例えば、学生への関わり方、指示の出し方、意見抽出におけるアドバイスの仕方など)を統一する必要があるため、BSを行う際には、こまめに教員間連携を図っている。また、KJによる情報統合技術も併せて伝えている。さらに授業以外にもこれらを取り入れた学生主体のまちづくり活動¹²⁾や学外での発表¹³⁾なども積極的に行っている。授業と課外活動で同時に取り扱うことでより実践的な能力が身につくと考えている。

また、2020年度からはインターネットを活用して、ZoomやMeet、Teams等を使い分けながら、これらのツールを使用した場合のファシリテーションも行っている。とくに基礎研究や卒業研究のゼミ(4~5名対象)の場合には、Zoomのブレイクアウトセッション(遠隔でグループ討論を行う)が有効であり、学生にもこれらの対応に慣れてもらうための機会をなるべく多く作り出している。

3.責任の範囲（理念を実現するための方略Ⅰ～Ⅳと、各科目との対応）

理念を実現するための方略Ⅰ～Ⅳと、各科目との対応を現在までに経験した主要な科目で説明する（全科目の詳細はエビデンス資料²⁾を参照）。また、クラス担任とクラブ顧問で経験した教育的視点からの取り組みと方略との対応を補足的に追記する。

3-1.科目との対応

(1)建築計画

概要：本科目は、建築の意匠・デザインを検討する上で、有用となりうる西洋・日本・近代建築史を学び優れた技法を理解するとともに、建築を形づくる構成要素や単位空間に関する基本事項について学び、それらを踏まえた設計製図・模型製作を通じて計画の意図を的確に伝える能力を養うことを目的とする。

方略との対応：方略Ⅱの「建築スケッチ方式の講義ノート」と、方略Ⅲの「穴埋め方式の講義ノート」を採用している。その理由は専門的な知識を初めて身につけようとしている3年生に対して、基礎的な知識を、キーワードとして穴埋め方式により記述し、覚えさせるためである。講義ノートを活用した『学び合い』の実施と『ループリック評価』の採用により、アクティブ・ラーニングも実現されている。

(2)生活環境計画

概要：本科目は、おもに人の快適性に関わる生活環境について学習するとともにその上で環境設備に関連する技術的な専門知識を身につけることを目的とする。

方略との対応：前期は方略Ⅲの中でも、「通常方式の講義ノート」を採用している。ここで注意しなければならないのは、通常方式とはいえ、毎回の授業ごとに回収・チェックを行い返却している点である。とくに優秀なノートに対しては「鰻マーク」と呼ばれる認定マークを与えている。学生に対して、このマークが成績には直接反映されないことを事前に宣言しておくことで、こうした作業に関して点数だけでない価値を学生自身が見出すことにつながる。

(3)ユニバーサルデザイン

概要：この講義では、これからの「ものづくり」に求められるユニバーサルデザインの概念について、事例や演習を通して理解することを目的とする。

方略との対応：方略Ⅲの「プレゼンテーションの工夫」に加え、方略Ⅳの中でもグループ学習の中で、状況に応じたリーダーシップを身につけさせるための工夫を採用している。そのために、BSによる討論とKJを用いた意見の集約を同時に実施している。

(4)建築造形実習

概要：本科目は、建築の造形原理やデザイン技法について学び実習を通じて制作のプロセスに触れながら、建築造形に関わる技術的な専門知識の習得を目的とする。

方略との対応：方略Ⅲの中でも、ネームラベルを採用し、作品としての価値を高めることで学習意欲を向上させる取り組みを行っている。また、評価項目を詳細に設定し、価値基準を明確にすることで、一見すると主観的になりがちな美の採点にもある一定の客観性を持たせている。

(5)基礎研究

概要：基礎研究は、これまで学んできた知識や技能を基礎として、それらを複合・融合し、計画的に研究・調査・計画・実験・製作などを総合的に行い研究活動の基盤となる能力を身につける総合的な学習である。

方略との対応：ユニバーサルデザイン科目と同様に方略Ⅲの中で「プレゼンテーション能力の向上と、リーダーシップの習得に向けた取り組みを行っている。

(6)卒業研究

概要：指導教員のもとで具体的に取り組むテーマを決定し、学生が主体となって研究を進める。

方略との対応：方略Ⅰの学生にとって心地よい居場所の創出に加え、方略Ⅲのプレゼンテーション方法の工夫、方略Ⅳのファシリテーション能力を高める工夫などを行っている。卒業研究は少人数制のため、きめ細やかな対応が可能である。また、Zoomのブレイクアウト・セッションを活用することにより遠隔でのコミュニケーションも可能となっている。

3-2.その他の取り組みとの対応

(1)クラス担任（4年次・5年次 都市環境コース）

概要：府大高専における担任制度は、大学の担任制度とは異なりその責任の範囲は多岐にわたる。4年次の担任で最も重要なものは夏期に行われるインターンシップと、年度末に行われる進路指導（就職・進学）等における企業・大学の人事担当者との調整業務である。私は2015～16年度、2019～20年度に4・5年次の担任を受け持っているが、都市環境コースではここ数年、インターンシップも進路指導も「民間企業」「公務員」「進学（大学3年次への編入）」の3パターンに希望が大別される傾向にある。

方略との対応：方略Ⅱの身につけた専門知識を発信することや、方略Ⅳの発言や会話の流れを調整する能力を向上させるために、エントリーシートや履歴書の書き方の指導や、面接による受け答えの指導などを行っている。府大高専では、常識的・一般的な指導を外部委託先（例えばマイナビ等）と提携しているものの、学生へのより具体的な個別対応はクラス担任が行うことになる。その際、これらの方略が非常に有効であり、私がクラス担任をした年度の就職率と進学率は非常に高い率を保っている。

(2)クラブ活動（Space Design Club）

概要：私が主顧問をしているSpace Design Club（スペースデザインクラブ）は建築や都市を対象として「ものづくり」を行うクラブである。主に、学外の設計コンペティションへの参加や、建築見学会の企画・実施を行っている。また、大阪府都市整備部が主催している森林環境の保全・再生と都市の活性化を目的とした「笑働の森づくり」活動へ月1回、定期的に参加している。「笑」顔で協「働」するという意図が込められたこの活動において、Space Design Clubでは森林で採れる間伐材を活用したイスやベンチ、人道橋やガイドレールの木質化、チップ舗装による散策路、展示ブースの製作などを地域住民と協働で行っている。

方略との対応：笑働の森づくり活動では、複数の学術機関（府大高専、桃山学院大学、大阪産業大学、大阪府立大学など）の学生が主体となって活動を展開している。具体的には定期的開催される活動の年間スケジュール、各月の活動プログラムの企画、各プログラムを実行するにあたり必要となる間伐材の準備など、通常であれば大阪府やNPO団体などの「おとなたち」が行うことをすべて、学生である「こどもたち」が行っている。このように学生がすべてを自己決定してまちづくりを行う事例は全国でも類を見ない貴重なロールモデルとなっている。その際に、活用されているのが方略ⅣにおけるBS&KJである。これは地域社会のニーズを抽出する際にも取り入れられるだけでなく、学生主体で方向性を検討する際にも取り入れられている。私が求める教育理念を実践的に体得していくには、こうした場が最も効果的であると考えている。なお、この成果の一つとして2019年度には日本高専学会においてSpace Design Clubの一連の活動が評価され『活動奨励賞』を受賞するとともに校長顕彰も授与された。

4.評価と改善すべき点

4-1.公開授業シートに基づく自己評価・他己評価と改善点

府大高専では、第三者からの客観的な授業評価を受けるため、「公開授業」が設定されており、公開授業シート¹⁴⁾にその評価内容が記録される。公開授業シートに設けられている質問項目は、「授業の準備状況」「教材の活用」「声の大きさ・言葉の聞き取りやすさ」「黒板・パワーポイントの文字の見やすさ」「双方向授業（対話・様子の把握など）」「全体的な感想」といった6つの項目である。その結果、「授業の準備」と「声の大きさ・言葉の聞き取りやすさ」の向上を図ることが、「双方向授業」につながり、結果的に「全体的な感想」すなわち総合的な評価を向上させる要因となりうるということが明らかとなった。従って、「教材の活用」が非常に重要な位置をしめていることから、その工夫の仕方について詳細に検討することが有効である（従って、このことから本TPで挙げている方略Ⅰ～Ⅳのような工夫が重要であるといえる）。

4-2.自主的な教員の集まりに基づく授業改善点の検討

教育経験年数が短いうちは、様々な問題が生じる機会も多い。そこで同じ状況にある若手教員が集まり、『教育経験年数が短いゆえに生じる教育・研究・運営に関する諸問題や各種情報の共有を図るとともに、その解決に向けた報告・連絡・相談の場』を設け、専門・一般の垣根を越えてコミュニケーションを図り、相互連携が取りやすい体制「自主研究会」を組織している。なお、その研究会¹⁵⁾では、公開授業の結果を踏まえた改善点に関する検討が行われ、その結果、「府大高専の教育理念・目標に即して、講義科目における板書・テスト・説明といった基本的取組みに対する工夫を行うとともに、双方向性を作りだすための多面的なアプローチを試みる」といったことが確認されている。5年が経過した頃、この自主研究会は姿・形を変えて教職員で趣味の音楽演奏を楽しむ「自主的な集まり」へと発展的解消を遂げた。これは研究会という堅苦しい雰囲気の中で教育を語るのではなく、趣味の時間を楽しむ中で教育・研究・運営に関する諸問題や各種情報の共有を図ろうという意図のためである。心地よい居場所（状況）は何も学生だけに限らず、教職員にとっても重要な要素であると考えている。

私自身、着任してから8年が経過しており、私の後にも後進の教員が少しずつ増えてきている。中堅の立場として、これまでの経験を伝えていく必要性を感じている。

4-3.ティーチングポートフォリオに関する取組み

本TPも含め、私自身はTPの取組みに積極的に関わっており、すでにアカデミックポートフォリオ（AP）の作成も行っている。また、外部委託も含めると現在までに10名以上に対するメンターを経験している。メンターを経験することで、得られるメリットとして①他教員の教育理念に触れることが自己省察にもつながる、②他教員との交流が生まれる、などが挙げられる。また、TPは半年程度の周期で開催されるため、定期的に教育活動を振り返る良い機会となっている。なお、TP更新は今回で3度目となる。

5.今後の目標

5-1.短期目標

(1)クラブ活動における教育的視点からの学外表彰

私はこれまでに様々なクラブ顧問（野球部・現代音楽部・茶道部・Space Design Club）を担当してきた経緯がある。前々回の更新ではこれらの取組みを体系的に整理することを短期目標の一つに掲げ、前回の更新ではさらにクラブ活動が教育的な視点から学外表彰を受けることを目標に掲げたが、いずれも達成することができた。

今後はクラブ活動における教育的効果と、地域社会への貢献を結びつける取り組みを行っていく。クラブ活動が学内に閉じられるのではなく、社会の中で意義のある活動につながりつつ、教育上の有効性を示していくことを目標に掲げたい。

(2)遠隔授業支援における BS&KJ の活用

前回の更新では、高専業務の中でも学生副主事と呼ばれる管理業務に携わる中で学生組織「学友会」との関係に着目し、その中で BS&KJ を取り入れることを目標に掲げたが、短い関わりの中でその能力を伝達することは困難であった。また、役職も代わりその目標を設定するには無理が生じている。従って短期目標の再設定をしたい。

働き方や生活様式が変化していく中で、遠隔授業支援の方法が模索されている。そこで、遠隔授業支援における BS&KJ を活用したファシリテーションの手がかりを見つけることを目標に掲げたい。

5-2.長期目標

以下に掲げる 2 つの目標は、教育活動の理念を実現するための方略を継続的に進めていくために、長期的なスパンで検討していくべき内容である。

(1)「相互の関係」を捉えられる人

状況に応じたリーダーシップを発揮できる人を育てるためには、府大高専のコース特性を活用し、各々の専門性を尊重しつつ、その相互の関係を促進させる手法・技術・行為などを身につけさせる必要がある。

(2)各々の専門性を「拡張」できる人

各々の専門性を活かしつつ、応用的な視点からオリジナリティを創出できる人を育てるためには、自身の専門分野に閉じこもるのではなく、他の専門分野に触れることで、各々の専門性を拡張していこうとする姿勢が重要である。

6.エビデンスリスト

- 1) 大阪府立大学工業高等専門学校教育理念
- 2) シラバス（2012 年度～2020 年度）
- 3) 研究室・教室のレイアウト（3DCG、リノベーション状況写真、クラス掲示写真）
- 4) 研究成果の応用（論文：認知症高齢者の居住環境整備に関する書誌学的研究）
- 5) 授業「建築計画」における建築スケッチ方式の講義ノート（事例）
- 6) 授業「生活環境計画」における通常方式の講義ノート（事例）
- 7) 授業「建築計画」「生活環境計画」における穴埋め方式の講義ノート（事例）
- 8) 作品掲示用コルクボード（作品掲示写真）
- 9) ネームラベル
- 10) 授業「生活環境計画」における定期試験・レポート課題（事例）
- 11) 授業「ユニバーサルデザイン」におけるグループ学習（授業風景写真）
- 12) 笑働の森づくり活動での取組み（活動風景写真）
- 13) 他大学との合同ゼミ記録（本科学生発表写真）
- 14) 公開授業シート・自己評価・他己評価のまとめ
- 15) 自主研究会 議事録、教職員バンドのチラシ